うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌
第５４号
発 行 日：2023年３月３１日
編集発行：魚津埋没林博物館
印　　刷：魚 津 印 刷（株）

きらめく風？

歌の詞などに“きらめく風”“光る風”などの表現がありますが、実際に風が光っているのを見たことがあるでしょうか。この写真では、風向きに沿って光る線が何本も描かれたように見えます。“風光る”は春の季語ですが、この写真を撮ったのは、立冬も過ぎ本格的な冬が迫る11月半ば。東北地方などでこのような光景を“雪迎え”と呼ぶ地域があるようです。

風を見る

館　長　石須　秀知

風は、空気の流れです。普通、空気は目に見えないので、風も目に見えません。私たちは、飛ばされた物体などから、間接的に風の動きを目にすることができます。また、目に見える形で残された痕跡から、過去に吹いた風の様子を読み取ることもできます。今回は、今までに撮った魚津の自然の写真の中から風に関するものをいくつかピックアップして紹介します。

写真1　蜃気楼
（2020年6月9日、魚津市大町海岸）

まずは蜃気楼（上位蜃気楼）から。魚津の海岸は江戸時代からの蜃気楼の名所。毎年4～5月の連休ごろには、大勢の見物客が博物館周辺の海岸で蜃気楼の出現を待っています。蜃気楼が見えるか見えないか、それを左右する要因の一つが風です。暖かい空気や冷たい空気の動き＝風が、光の屈折が起きる条件を整えて蜃気楼を見せてくれるのです。つまり、蜃気楼は風が作る風景の一つと言ってよいでしょう。

写真2　たなびくクモの糸
（2022年11月12日、魚津市片貝川南又谷）

写真2と表紙の写真は、クモが空中に放出した糸にぶら下がり風に乗って長距離を飛ぶ“バルーニング”という行動によるものです。無数のクモが一斉にバルーニングをして飛んできた糸が木の枝に引っかかり、吹き流しのように風の流れに沿ってたなびいています。撮影時には、引っかからずに上空へ舞い上がっていく糸もたくさん見えました。逆光できらきら光ってきれいですが、クモが嫌いな人にはあまり見たくない光景かもしれません。バルーニングには風だけでなく“電場”が関係しているという近年の報告もあり、単純そうに見える現象にもまだ発見が隠れている一例でもあります。

写真3、4　つるし雲
（2018年6月28日、魚津埋没林博物館から）

写真3と4は、クモではなく雲、ちょっと変わった雲です。平たい雲が何段も重なったように見え、少しずつ形を変えながら長時間同じ場所にとどまっています。これは“つるし雲”と呼ばれ、山を乗り越えた風が上下に波打つ“山岳波”

によってできます。富士山周辺で見られる雄大なものがよく知られ、魚津でも山脈の風下にたまに見られます。この雲は上空の風が強いことを教えてくれます。

写真5　雪煙の上がる毛勝山
（2020年3月17日、魚津埋没林博物館から）

写真5では、雪山から煙が上がっています。煙の正体は風で吹き飛ばされた雪で、“雪煙”（せつえん・ゆきけむり）と呼ばれます。これも上空の風が強いことを物語ります。雪煙が上がるには、風が強いだけでなく、雪がさらさらのパウダースノーでないといけません。この写真を撮った日の前日には平地ではみぞれが降っていて、山岳地帯では氷点下で雪になっていたと思われます。平地の3月中旬は春めいてくる時期ですが、高山ではまだ厳しい冬です。

写真6　雪まくり
（2018年2月8日、魚津埋没林博物館敷地）

続いて雪と風ということで、“雪まくり”を紹介します。雪が風で転がされてロール状に成長したものです。これができるためには、下の雪が硬く、その上に“さらさらでもべたべたでもない新雪”がちょうどよい厚さに積もり、その新雪を完全に吹き飛ばすのではなく“まくって転がす”くらいの強さの風が吹く必要があります。条件が難しいので出会う機会は少ないですが、博物館では2001年にも見られました。

写真7　稜線の一部だけ雪が少ない僧ヶ岳
（2022年4月8日、魚津埋没林博物館から）

もう一つ雪と風に関するもの。写真7は、春先の僧ヶ岳の様子です。稜線の一部だけ雪が少なく、黒い山肌が現れています。これは谷の地形によってその部分だけ冬の季節風が激しくぶつかり、雪を吹き飛ばすため積雪が少ないことを意味します。その周囲に生育したオオシラビソは、低温で強烈な季節風が当たる風上側の枝が枯死し、風下側だけに枝がある“旗状樹形”という独特の形をしています。

写真8　オオシラビソの旗状樹形
（2014年7月22日僧ヶ岳）

風が見せるいろいろな現象はまだまだあります。みなさんの身の回りでも探してみてください。

シリーズ

埋没林の仲間たち ㊽

イヌガヤ（イチイ科）

ハイイヌガヤの未熟な種子

ハイイヌガヤの雄花

イヌガヤは、高さ10mほどになる常緑の針葉樹です。日本の岩手県～鹿児島県に分布しますが、日本海側の多雪地帯ではおもに変種のハイイヌガヤが分布します。ハイイヌガヤは多雪に適応した低木です。

イヌガヤの名前は、カヤに似ているが種子が苦く食用にならないことに由来します。しかし、古代には木材が弓に使われたり、種子から取れる油は灯明油として優れているなど、利用価値がないわけではありません。アーモンドのような形の種子の核は食べられませんが、それを包む外皮は熟すと甘く食べることもできます。

魚津埋没林では、1952～3年の発掘調査で“イヌガヤ”の種子が記録されています。現在の魚津市を含む富山県内にはイヌガヤは自生していないと思われ、ハイイヌガヤが広く生育しています。両者の種子での判別は困難だと思われるので、埋没林から出土したのもハイイヌガヤの可能性があります。

ご利用案内

- ○ 開館時間　午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）
- ○ 休館日　12月1日から3月15日までの木曜日（祝日の場合開館）、年末年始（12月29日～1月1日）
- ○ 入館料　・大人（高校生以上）…640円　・小中学生…260円
- ○ 交通　・あいの風とやま鉄道魚津駅／・富山地方鉄道 新魚津駅 } 下車1.5㎞（タクシー…5分／徒歩…25分）
  - ・北陸自動車道魚津ICから3㎞車で10分
  - ・魚津市民バス 埋没林博物館前下車

特別天然記念物
魚津埋没林博物館
UOZU BURIED FOREST MUSEUM
〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814☎(0765)22-1049
ホームページ https://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/
e-mail nekkolnd@city.uozu.toyama.jp